

共働き子育てに対する意識調査研究

——未婚者及び既婚者の意識——

石川 洋子

I. はじめに

厚生省「人口動態統計」によると、平成元年の合計特殊出生率^{注1)}が1.57^{*1)}となり、その出生率の低下ぶりが話題を呼んでいる。特に大都市及びその周辺圏で低い傾向にあるようで、東京(1.24)、大阪(1.46)^{*1)}という数値も報告されている。これらの出生率低下の原因としては、出産適齢期の女性数の減少と、未婚率の上昇なども上げられている^{*2)}ようである。

この出生率算出の際の分母を、有配偶の女子に限定した平均出生児数^{注2)}では、2.17(昭和62年)^{*3)}となつてはいるものの、その一方で、無職の母親に今後の就業意識を尋ねた調査^{*4)}によると、その64.2%の者が仕事をしたいと考えているという報告も出されている。

好景気と人手不足から企業の側からの女性への就労要請や女性の側の意識の変化などにより、今後もパート就労も含めた女性の就労率は増加するものと見られるが、その一方で、出生率の低下などに見られるように子供を持ちにくくなっている状況や、働きながらの育児(子育て)の問題はなかなか解決され難いものようである。

以上のような問題意識の下に、子育ての問題をも含めて、今後の女性の就労がどのような方向に進むのかを探るために、現在仕事をしている女性達を対象に仕事と育児に関する意識調査を行ったので、その結果を報告する。

II. 対象及び調査方法

調査対象は、東京都内のSグループ系列の百貨店、量販店その他の各社に勤務する女性166名。

筆者が1985年に、教師と看護婦を対象として実施した調査の項目を参考に一部をつけ加えて質問紙を作成し、手渡しの上、調査表記入後郵送してもらった。(有効回収率、55.3%)

調査実施日は、1990年6月～7月。

III. 結果ならびに考察

1. 調査対象について

対象の属性は、次表のとおりである。未婚者は27.1%、既婚で子供のいる者が57.2%であった(子供の平均人数、2.02人)。

年齢は、20歳代が20%、30歳代が23.1%、40歳以上が57.0%であった。

職業の勤務形態別では、正社員として働く者が29.0%、パート勤務(準社員)の者が、69.1%であった。

正社員では未婚者が多く、68.1%を占め、子供を持つ者は17.0%にとどまっていた。また、正社員に占める20代、30代の比率が合せて78.7%と、若い層が多くなっている。

逆にパート勤務の者の内、77.5%の者が子供有りと答えており、年齢も40歳以上が75.7%を占めている。

学歴別に見ると、全体で短大・大卒以上の

者は、30.1%であるが、正社員に限ると45.7%と高くなっている。

表1 婚姻状況

	N	%
未婚者	45	27.1
既婚者(子供なし)	26	15.7
既婚者(子供あり)	95	57.2
TOTAL	166	100.0

表2 年齢

%(N)

20~24歳	25~29歳	30~34歳	35~39歳
8.5(14)	11.5(19)	17.0(28)	6.1(10)
40~44歳	45~49歳	50~54歳	55歳以上
19.4(32)	27.3(45)	9.1(15)	1.2(2)

表3 勤務形態

	N	%
正社員	47	29.0
パート	112	69.1
その他	3	1.9
TOTAL	162	100.0

表4 勤務形態別婚姻状況

%(N)

	未婚	既婚(子無)	既婚(子有)	TOTAL
正社員	68.1	14.9	17.0	100.0(47)
パート	7.2	15.3	77.5	100.0(111)
その他	66.7	33.3	0	100.0(3)

表5 勤務形態別年齢状況

%(N)

	20~29歳	30~39歳	40歳以上	
正社員	48.9(23)	29.8(14)	21.3(10)	(47)
パート	5.4(6)	18.9(21)	75.7(84)	(111)

$df=2, x^2=52.27$ ** $p < 0.01$

表6 学歴

%(N)

中卒	高卒	専門学校卒	短大卒
0.6(1)	48.2(80)	19.3(32)	19.9(33)
大卒以上	その他		
10.2(17)	1.8(3)		

表7 勤務形態別学歴状況

%(N)

	中卒	高卒	専門学校卒
正社員		37.0(17)	17.4(8)
パート	0.9(1)	54.5(60)	20.9(23)

短大卒	大卒以上	
21.7(10)	23.9(11)	(46)
18.2(20)	5.5(6)	(110)

$df=4, x^2=13.01$ * $p < 0.05$

2. 仕事について

現在或いは将来の仕事について、どのような意識を持っているのかを分析したものが表8~表11である。

まず、「仕事をしていてよかった」とする者は、「とても・すこしそう」を合わせると84.4%にのぼっており、「仕事をやめたい」者は、16.9%にすぎず、仕事に対する積極的な姿勢が感じられた。

表8 仕事について

%(N)

	とてもそう	少しそう	どちらでもない	あまりでもない	まったくでない	TOTAL
仕事をしてよかった	41.0(68)	43.4(72)	13.3(22)	1.8(3)	0.6(1)	100.0(166)
できれば仕事をやめたい	4.2(7)	12.7(21)	25.9(43)	28.9(48)	28.3(47)	100.0(166)

将来の仕事の仕方に対する質問でも、
 「フレックスタイムなど仕事の仕方自体が変
 える」
 「これからは女性も、子供をもちながら仕事
 をする人が多くなる」
 「家事や育児を夫婦で分担するようになる」
 などの将来像を支持する者が91.5%～89.2
 %にのぼっていた（表9）。

しかし、一般的な女性と仕事に対する将来
 予測とは別に、未婚者にのみ「今後あなたは

どうするか」を尋ねてみると、表10のように
 少し異なる値が出てきている。

「今後必ずしも結婚したいとは思わない」
 者が、13.3%にとどまり、結婚に対する意欲
 の高さが見られる一方、「結婚しても仕事は
 続けたい（53.3%）」、「子供ができて仕事
 は続けたい（31.1%）」と、子供をもちなが
 ら働く女性になろうという姿勢を持つ者が3
 割に落ちている。

表9 将来の女性の仕事と生き方について

%(N)

	と と も そ う	少 し そ う	い え な い	ど ち ら と も	あ ま り そ う で な い	ま った く そ う で な い	T O T A L
これからはフレックスタイム制な ど仕事の仕方自体も変っていく	60.8 (101)	30.7 (51)	6.0 (10)		1.2 (2)	1.2 (2)	100.0 (166)
結婚をしない女性が今後増える	28.3 (47)	36.7 (61)	27.1 (45)		6.0 (10)	1.8 (3)	100.0 (166)
これからは女性も、子供をもちな がら仕事をする人が多くなる	65.1 (108)	24.1 (40)	6.0 (10)		1.2 (2)	3.6 (6)	100.0 (166)
家事や育児を夫婦で分担する傾向 が強くなる	38.0 (63)	51.2 (85)	9.6 (16)		0.0 (0)	1.2 (2)	100.0 (166)
夫の身の回りの世話をすることは 妻の役割の一つ	18.1 (30)	35.5 (59)	26.5 (44)		13.3 (22)	6.6 (11)	100.0 (166)

表10 将来のあなた自身について（未婚者）

%(N)

	と と も そ う	少 し そ う	い え な い	ど ち ら と も	あ ま り そ う で な い	ま った く そ う で な い	T O T A L
いい仕事するには 独身が一番いい	8.9 (4)	17.8 (8)	55.6 (25)		13.3 (6)	4.4 (2)	100.0 (45)
今後必ずしも結婚し たいとは思わない	2.2 (1)	11.1 (5)	24.4 (11)		28.9 (13)	33.3 (15)	100.0 (45)
結婚しても、できれ ば仕事は続けたい	13.3 (6)	40.0 (18)	22.2 (10)		15.6 (7)	8.9 (4)	100.0 (45)
子供ができてでもでき れば仕事は続けたい	2.2 (1)	28.9 (13)	35.6 (16)		24.4 (11)	8.9 (4)	100.0 (45)

また、現在仕事をしている調査対象全員に対しての「自分も専業主婦になりたい」かどうかの質問に対しては、40歳以上の者はその68.1%がNOと答えているのに対して、20代の者は48.5%の者しかNOと答えていない(表11)。20代の者には専業主婦という未知のものに対するあこがれがあるのかもしれないが、今若い女性たちにあると言われている専業主婦願望の一端が見えるようである。

「夫の身の回りの世話をすることは妻の役割の一つ」の項目に対してYesと答えている者も、53.6%の数値になっている(表9)。ここには年代差はなく、どの年齢層の女性も同様に感じているようである。家事や育児も夫婦で分担といった一般的な将来予測とは別に、個人の意識のレベルでは、まだまだ以上のように割り切れないものがかかえている者も多いように思われた。

表11 あなた自身、専業主婦になりたいか %

	とてもそう	少しそう	どちらでもない	まあいい	まあよくない	(N)
20歳代	9.1	12.1	30.3	36.4	12.1	(33)
30歳代	5.3	7.9	31.6	34.2	21.1	(38)
40歳以上	2.1	7.4	22.3	40.4	27.7	(94)

$df = 8, x^2 = 45.53, ** p < 0.01$

3. 仕事をもつ女性の意識の因子分析

現在仕事をもっている女性たちの、仕事や生活に対する意識の分析をするために、因子分析を試みた。

固有値1以上の2因子を抽出し、バリマックス回転をさせた結果が表12である。

第I因子に高い負荷量を示す項目は、

「今の生活に何となく不満 (.754)」

「もっと違う生き方ができたのではないか (.703)」

「もう少し遊べるゆとりが欲しい (.673)」

「もう少し時間が欲しい (.618)」

「いつも疲れているようだ (.521)」

などであり、「人生や生活全般に対する不満の因子」とでも呼べるように思われる。

第II因子に高い負荷量を示す項目は、

「仕事と夫との両立ができない時は仕事をやめても仕方がない (-.803)」

「仕事と子供との両立ができない時は仕事をやめても仕方がない (-.699)」

「夫の身の回りの世話は妻の役割 (-.649)」

「専業主婦になりたい (-.403)」

の項目であり、「仕事遂行型」とでも呼ぶべき因子であった。

これらの2因子の因子得点を属性別にみたものが表13～表15である。

第I因子の「人生や生活全般に対する不満因子」の平均得点に差がみられ、勤務形態別では、正社員よりパートに高く、40歳以上で子供のある者に高い結果であった。

仕事自体が正社員よりもパート勤務者の方により負担であるとは言えないであろうから、この不満感の高さは子供をもつ40歳以上の年代の者にみられる特徴とも言えるようである。

表12 仕事をもつ女性の意識の因子分析

項 目	因 子		
	I	II	h^2
今の生活に何となく不満	.754	.112	.620
もっと違う生き方ができたのではないか	.703	.025	.620
もう少し遊べるゆとりが欲しい	.673	.064	.644
もう少し時間が欲しい	.618	.116	.644
いつも疲れているようだ	.521	.144	.394
仕事をしているのは経済的理由が主	.477	.063	.413
できれば仕事をやめたい	.465	-.183	.362
職場の人間関係で悩んでいる	.455	-.018	.347
自分の能力のなさを痛感	.416	-.082	.329
女性は外で仕事をするのに向いていない	.322	-.285	.372
仕事と夫との両立ができない時は、仕事をやめても仕方がない	-.059	-.803	.647
仕事と子供との両立ができない時は、仕事をやめても仕方がない	-.125	-.699	.647
夫の身の回りの世話は妻の役割	-.098	-.649	.544
専業主婦になりたい	.257	-.403	.372
(固 有 値)	3.37	1.90	
(寄 与 率)	18.7	10.6	29.3

表13 第I因子の得点(勤務形態別)

勤務形態	正社員	-.044	* t=2.01 p<0.05
	パート	.020	

表14 第I因子の得点(年代別)

年 代	20歳代	-.049	* t=2.38 p<0.05
	30歳代	-.056	
	40歳以上	.036	

表15 第I因子の得点(子供の有無別)

子供の有無	子供無	-.057	** t=3.35 p<0.01
	子供有	.043	

4. 共働き子育てをする女性の意識の因子分析

表16は、子供がいる女性にのみ尋ねた項目の因子分析の結果である。

固有値1以上の3因子を抽出し、バリマックス回転をさせた。

第I因子に高い負荷量を示す項目には、
「子供のことでがっかりすることが多くなった(.718)」
「子供のために最善を尽くしていないようで不安(.698)」
「子供に問題が起きると自分のせいと思う(.665)」
「子供が小さかった時の方が楽しかった(.646)」
「もう少し子育てに自信がもてたらと思う(.638)」

「もう少し子供と一しょにいなければと思う (.540)」

「時々子供にとって悪い母親だと思う (.416)」

などが含まれている。

これらの項目は、「育児(子育て)不安因子」とでも呼ぶべきものであろう。これらの数値は、筆者が1988年*5)に専業主婦に対して行なった調査の際の結果とほぼ同じような値を示しており、母親の気持自体は専業主婦も共働きの母親もあまり変わらないものと言えよう。

第II因子に高い負荷量を示す項目には、

「夫に家事は頼みにくい (.825)」

「夫に子供の世話は頼みにくい (.791)」

「仕事に対する夫の理解が得られない (.554)」

「夫がもう少し家庭のことを考えてくれたら (.507)」

「夫とあまりうまくいっていない (.472)」

などが含まれ、「夫因子」と呼べるであろう。

第III因子に高い負荷量を示す項目には、

「結婚とは制約される部分が多い (.659)」

「子供をもつと制約される部分が多い (.599)」

「夫の収入に不満 (.433)」

「保育施設の整備をして欲しい (.330)」

などが含まれ、「結婚や子供などによる制約感の因子」のようなもの感じられた。

表16 子育てをしながら仕事をする女性の意識の因子分析

項 目	因 子			
	I	II	III	h^2
子供の事ではっきりする事が多くなった	.718	.111	.029	.703
子供のために最善を尽くしていない	.698	.027	.120	.505
子供に問題が起きると自分のせいと思う	.665	-.023	.111	.541
子供が小さかった時の方が楽しかった	.646	.263	-.037	.703
もう少し子育てに自信がもてたら	.638	.169	.277	.540
もう少し子供と一しょにいなければ	.540	.184	.155	.530
もう少し子供の教育に力を入れたい	.494	.130	-.019	.530
時々子供にとって悪い母親だと思う	.416	-.341	.225	.364
夫に家事は頼みにくい	.012	.825	.134	.763
夫に子供の世話は頼みにくい	.153	.791	.072	.763
仕事に対する夫の理解が得られない	.237	.554	-.071	.456
夫がもう少し家庭の事を考えてくれたら	.135	.507	.475	.525
夫とあまりうまくいっていない	.188	.472	.233	.383
結婚とは制約される部分が多い	.113	.199	.659	.476
子供をもつと制約される部分が多い	.111	.067	.599	.418
夫の収入に不満	.242	.286	.433	.476
保育施設の整備をして欲しい	.089	-.275	.330	.703
(固 有 値)	4.29	1.99	1.15	
(寄 与 率)	23.8	11.1	6.4	41.3

この子供がいる95名中、正社員として働いているものが8名であったが、3因子の因子得点に勤務形態による差異は見い出せなかった。子供がいる場合の意識の違いというものは、その属性による差というよりは、もう少し個人的な事情によるところが大きいものようである。

これらの因子分析の結果を見る限り、子育てをしながら仕事をする場合のキーポイントとなることは、次のように言えるであろう。

まず、核家族化や近隣とのつき合いの希薄化、また毎日のあわただしさの中で、働く母親たちが、子育てをする中でのつまづきや不安感をどう乗り越えていくかであろう。この育児不安の問題は、現代の専業主婦が抱えている悩みと同等とも言えるものである。

もう1つは、「夫が協力をしてくれない」と歎く一方で、「夫の世話が十分にできなくて申し訳ない」とか「夫には家事は頼めないから自分でやらなくては」といった働く母親達自身の意識を自分でどう整理していけるかであろう。これは、妻自身や夫だけの問題ではなく、社会全体として解決を探るべきものとも言えるようである。

3番目は、「私は制約を受けていて自由ではない」といった感情をどう処理するかである。保育施設の整備の遅れといった社会的な側面からくる場合もあろうが、先の「人生や生活に対する不満因子」の結果を見ても、自分自身の気持の持ち方にも関わるものと思うのである。

IV. まとめ

共働き子育ての問題とその将来の方向を探るために、デパートやスーパーに勤務する女性166名を対象に質問紙調査を実施した。

調査対象を勤務形態別にみると、正社員では未婚者が多く68.1%を占め、子供を持つ者

は17.0%にとどまっていた。パート勤務の者は77.5%の者が子供有りと答えており、年齢も40歳以上が75.7%を占めていた。

現在「仕事をしていてよかった」とする者は調査対象全体の84.4%にのぼり、また全体の91.5%~89.2%が将来は共働きの女性が多くなり、家事や育児も夫婦で分担するようになるとしているものの、未婚者のみに「あなた自身はどうするか」を尋ねると、共働きを指向する者は、31.1%にすぎない結果であった。

仕事や生活に対する意識の分析のために因子分析をした結果、2因子が抽出された。第I因子は「人生や生活全般に対する不満の因子」、第II因子は「仕事遂行型の因子」とでも呼ぶべきものであった。

現在共働き子育てをしている女性の意識の因子分析の結果では、3因子が抽出された。第I因子は「育児不安因子」、第II因子は「夫因子」、第III因子は「結婚や子供による制約感の因子」であった。

将来の共働き子育てを考える場合、これらの問題をどう乗り越えていくのか、女性達自身の気持の持ち方を含めて、もっと社会全体で議論がなされていかなければならないと思われた。

[謝辞]

本調査を行うにあたって御協力をいただいたセゾングループの百貨店、量販店、その他各社に勤務する皆様方に、厚く御礼を申し上げます。

注1) 女子の各年齢別出生率の合計

注2) 完結出生児数

<引用文献>

- *1) 人口動態統計, 厚生省大臣官房統計情報部, 1990
- *2) 国民衛生の動向, 厚生統計協会, 53頁 1990
- *3) 昭和62年, 日本人の結婚と出産, 第9次出産力調査, 50頁, 厚生省人口問題研究所監修, 厚生統計協会, 1988
- *4) 最近の人口動態 第26号, 10頁, 厚生統計協会, 1990
- *5) 母親と就労に関する一研究, 石川洋子, 東京成徳短期大学紀要, 1989

<参考文献>

- 昭和63年度 人口動態社会経済面調査報告(出生), 厚生省大臣官房統計情報部編, 厚生統計協会, 1990
- 「共働き子育てをしている女性の育児と仕事に対する意識調査」石川洋子, 東京成徳短期大学紀要, 1986
- 「母親の就業と家庭生活の変動」原ひろこ編, 弘文堂, 1987
- 「母性の研究」大日向雅美, 川島書店, 1988